

思ひ草

第46号

令和7(2025)年1月28日 発行

学び「わかる」ことの大切さ

初等教育学科教授 ^{たぬま しげき} 田沼 茂紀



本誌「思ひ草」の命名は、他ならぬ初代センター長であった筆者です。それから16年の歳月を経て、今も教職関係者に「思ひ草」が読み継がれていることに深い感銘を受ける次第です。

さて、筆者は学校教育現場や教育センター、大学での教員養成、学会での人材育成と、多年「人づくり」に携わり、その道のプロたるべく自らを鼓舞しつつ励んで参りました。例えもう一度別の人生を送るチャンスを手に入れたとしても、きっと迷うことなく同じことを繰り返すに違いありません。それは、教育するという教職が国家・社会において必要不可欠な仕事であり、誇るべき職業だからです。

筆者が教育学、とりわけ道德教育学に興味を寄せ、今日までその研究分野の充実発展に寄与したいと志したきっかけは、学生時代に読んだペスタロッチの『隠者の夕暮れ』という岩波文庫の1冊でした。紆余曲折はあったものの、道德教育学研究の世界で初志貫徹ができたのはこの薄っぺらい1冊

との運命的な出会いであったと、感謝しているような次第です。

若い時分は、善とそうでないものの違いについて「分かる」だけでした。でも、道德教育研究の世界に身を置いて、何度も何度も反芻し、思考を重ねるうちに真実とそうでないものとの違いが「判る」ようになってきました。だからといって自分自身の日常的道德生活が改善されたのかというと、決してそんなことはありません。ただ、それがなぜ必要なのかと少しだけですが「解る」ようになってきました。

ドイツの偉大な哲学者であるエマヌエル・カントは、その名著『実践理性批判』の中で我々の心を充足するのは「私の上なるほしをちりばめた空と私のうちなる道德的法則である」という名言を遺しています。そんな「わかりそうで、わからないことをわかつてみる」ことこそ、「学ぶ」ことなのだ実感します。昨今の学校教育では合理的な「分かる」、「判る」へ傾斜し、「解る学び」が軽視されていないでしょうか。(了)

教え子八方より来たる、また楽しからずや

健康体育学科教授 ^{うえはら きちお} 植原 吉朗



「先生、お久しぶりです」

同窓会ではない。しかも次々と、そう声をかけられたのは、関東中学校剣道大会の会場でのこと。

その日私は、東京都学校剣道連盟理事長の立場でひな壇に座っていた。開会式が引けると、懐かしい顔が次々と私のもとへ挨拶に訪れた。関東一円で教職に就いた人間開発学部卒業生たちである。

「今、〇〇中学校で〇年目です」。赴任校で剣道部指導にあたり、予選を勝ち抜いて生徒を大会出場に導いた由。「うちの生徒の試合、しっかり見て下さいね!」

一方で、大会運営にあたる開催県赴任の者、審判員を務める者も代わる代わるやってきた。「先生、そんなところに座って、ずいぶんお偉いさんじゃないですか」、「こいつ、今ごろわかったか」。たわいない会話に、隣席の大会副会長も笑っている。「大学での教え子さんですか、いいですね」

彼らの中には、教職に就いてからも日々の仕事の傍ら努力を重ね、予選を勝ち抜き全国教職員剣道大会の県代表と

して出場した者もいる。生徒指導に追われ、なかなか自分の剣道どころではないだろうに、みんな、がんばってるな…。

目前の試合場で、教え子教員が監督をする学校どうしの試合が始まった。むむ、どっちを応援しようか…、どっちもがんばれ! 学生大会では監督席から選手を鼓舞してきた私も、つい血が騒ぐ。

表彰式で授与者を務め、閉会式を終えると、かつてゼミで手を焼いた輩が声をかけてきた。

「車で来たんすかぁ、先生。それじゃこの後みんなと飲みに行けないじゃないですか」、「オイオイ、そっちも引率した生徒たちを無事に帰すのが先だろ」、「あ、そうっすね。ハハハ」

街中に繰り出して、在学時代のバカ話に花咲かせられなかったのはちと残念。しかし今や皆いっばしの先生なんだから、致し方なしだ。

次に桜咲く頃大学を去る私には、立派な教師となった教え子たちの姿に喜びを噛みしめる一日となった。

教育実習



100準備して10を出せ

健康体育学科准教授 まちだ たつき 町田 樹

タイトルの言葉は、私の親友にしてスポーツ実況解説の盟友でもある板垣龍佑アナウンサー(テレビ東京)が、テレビ東京アナウンス部に代々伝わる名句として教えてくれたもので、「準備の大切さ」を表している。

スポーツ実況者はアスリートのプレーやゲームの見どころを語ることが仕事なのだが、実はスポーツ中継においては1秒単位で尺(時間)が厳密に決められていたり、目まぐるしくプレーが展開していくため、長々と語ることはできない。そのようなスポーツ実況者の道に進んだ若かりし頃の板垣アナは、局の先輩から次のように教えられたという。

スポーツ実況では10しか話せないかもしれないが、そこに対して10準備して臨むのではなく、100準備して臨みなさい。同じ10という尺でも、10の準備をした者と100の準備をした者とでは、その10の濃さに雲泥の差が開く。

翻って、私は教育実習生の頑張りを見ていて、自分自身が新米教員だった頃を思い出す。教員になった当初、右も左も分からない私は、授業で10準備して10出すのがやっとだった(いや、正直に告白すると7準備して無理やり10出していた)。しかし、教員5年目を迎えた今では、努力が少しずつ蓄積していき、40~50くらいの準備ができていような気がしている。

こうして準備が進み、自分の中の引き出しが増えるほど、学生の理解度やリアクションペーパーの内容に応じて話し具合を変えることができたり、あるいは、教えなければならない知識や理論を、学生が共感できる身近なトピックや時事ネタに引きつけながら伝えることができたりするようになっていくことを実感している。つまり、決められたことをその通りに伝える杓子定規な授業から、ジャズセッションのように目の前で聞いている学生と共創していく授業を提供できるようになるということだ。私はこのセッション的授業空間を作り上げることが、「主体的・対話的で深い学び」を形作る第一歩なのではないかと考えている。

おそらく教育実習を経験した学生は、授業を行う上で必要となる準備の量に圧倒されていることと思う。でも、心配はいらない。どんな先生でもはじめは準備0からスタートしたはずであるし、真摯に教壇に立っていれば年々自然とその数字は大きくなっていくはずだ。だから、焦らず無理せずゆっくりと準備してほしい。きっと数年後には、「自分にはたくさん引き出しがあるのに、10しか出せなかった」と、授業時間があっという間に感じられるようになるだろうから――。

教育実習で学んだ「生徒のため」の授業づくり

健康体育学科 3年 しばた みほ 柴田 美穂

私は都立高校で3週間教育実習を行い、高1・2年生の保健体育を担当しました。担当した授業の種目や時数が多くて準備や改善に苦戦しながらも、実習先の先生方や生徒、大学の先生方のおかげで充実した実習となりました。

今回の実習を通して多くの学びと経験を得ることが出来ました。中でも最も影響を受けたのは「目の前の生徒が見えているか」という教師としての視点でした。この視点を考えるきっかけになったのは、保健の授業の構成に関して保健体育科の先生方に相談をした時です。保健は「飲酒・喫煙・薬物乱用」の3回分の授業を担当していたのですが、喫煙の授業を作っている時に「教えるべきだと思う部分が多すぎるが故に詰め込み型の面白くない授業になっていること」について悩んでいました。すると先生に「柴田の目の前には生徒がいない」と言われました。「生徒のため」を最優先に授業を考え続けていた私にとっては衝撃的な言葉でした。しかし、「生徒にタバコを吸ってほしくない」という願いと「目の前の生徒たちは騙されるよりも断れない可能性の方が高い」ということを考えると教えるべきことが絞れました。高校生が知っておくべきことではなく、自分が教える生徒の現状(環境や思考の傾向、持っている知識など)を踏まえた上で教えるべき内容を吟味することの大切さに気付きました。

実習の最終週には多くのメッセージや素敵な花束をもらうことができたため、自分なりの頑張りがみんなに届いた気がしてとても嬉しかったです。また、学校にいる時間は学校でしかできないことのために使ったり、積極的にアクションを起こしたりすることで、実習をより充実させることができると感じました。この経験は将来教育現場に携わる際に活きると思うし、まずは数か月後に迫った副免許(小学校全科)の実習の際に活かせると思います。これからは吸収した多くの考え方を活用しながら自分のこだわりを見つけていきたいです。

教師塾

よこはま教師塾アイ・カレッジより

よこはま教師塾アイ・カレッジで得たもの

初等教育学科 4年 ^{なか お}中尾 ^{さ き}早希

私は大学3年生の9月頃から「よこはま教師塾アイ・カレッジ」に参加しました。授業づくりで大切なことや学級づくりで大切なこと、子どもとの関わり方についてなどたくさんのことを学ぶことができました。また、市内の施設で災害について学び、引率の訓練もしました。特に災害について市内の施設で学ぶ講座では学校にいる時に災害が起きた時にどのように対応していくべきか深く考えるきっかけになりました。

また、アイ・カレッジでは教師になりたいという同じ夢をもつ仲間と出会うことができました。講座の中でグループの仲間たちと意見交換をしたり、一緒に授業づくりをしたりして、交流を深めることができました。アイ・カレッジを卒業したあとも同じグループだった人たちと教員採用試験の対策を一緒に行ったり、教員採用試験の情報交換をしたりして、お互いに高めあいがながら試験に向けて勉強することができました。

アイ・カレッジでの講座や仲間たちとの関わりを通して教師になりたいという気持ちをより強くもつことができるようになりました。この気持ちを大切に4月から横浜市の教師として頑張っていきたいと思います。

よこはま教師塾アイ・カレッジでの学び

健康体育学科 3年 ^{かね こ}金子 ^{ふゆ ね}冬音

私は3年生の9月から「よこはま教師塾アイ・カレッジ」のベーシック講座に参加し、今もスタンダード講座を継続して受講しています。アイ・カレッジの講義では近年の教育問題や児童生徒との接し方など幅広い分野で最新の教育情報を学ぶことができます。アイ・カレッジの講義を踏まえて改めて大学の授業を受けてみると、新たな視点や気づきが生まれて大学の授業の内容がよりわかるようになりました。講義の他にも模擬授業や引率訓練があり、同じ夢を目指す仲間とたくさん検討を重ねてひとつの授業を作りあげる時間は普段授業では考えられないところまで深く考えることができ非常に勉強になり、今後の授業づくりの参考になると思いました。さらに、論文の書き方や指導案の書き方、横浜市の教育の特徴など教員採用試験にも活かせるような内容も学べます。これから教師体験プログラムというボランティア活動も控えているので、学んだことを活かして全力で児童生徒と向き合っていきたいです。

かながわティーチャーズカレッジより

関わり合いと学び合い

初等教育学科 4年 ^{あ べ}阿部 ^{ゆう き}優希

始めは、一次試験の免除というメリットに惹かれてティーチャーズカレッジのチャレンジコースを受けました。しかし、実際に通った今となっては、必要な経験であったと感じています。

多くはグループでの活動になるので、仲間と共にグループ活動に取り組んだり、お互いの模擬授業を受け合って改善したりと長期的に多くの人と関わるすることができます。模擬授業については、教科別にも分かれて行うため、専門的な助言も多くいただけました。

教育学講座や特別講座では、児童との関わり方や指導法、人権教育、コミュニケーションの重要性、授業づくり、学級経営などと幅広く学習できます。実践力向上講座では、普段では経験することの出来ない授業やイベントの補助に入らせていただいたりすることができました。スクールライフサポーターでは、継続的な児童との関わり、教師と児童の関わり方や授業参観、児童指導等を経験できます。これらの経験を通して、教師という職がより鮮明になったと感じています。

ティーチャーズカレッジでの出会いや学びを基に、全身全霊で教師という仕事を楽しくしていきたいです。

出会いと成長

初等教育学科 4年 ^{やま ね}山根 ^{り お}梨緒

私は、大学3年生の夏から約半年間、かながわティーチャーズカレッジのチャレンジコースに参加しました。ここでは、教育学講座、特別講座などと同じ熱意を持つ仲間たちとグループワークを通して知識を高めることや、実際に幾つかの学校でのボランティア活動等を通して実践的にスキルを身に付けることができました。カレッジに参加してなによりも良かったと思うことは、同じ夢をもつ仲間たちと出会えたことで毎回の講座が刺激になり、自分を大きく成長させることができたことです。カレッジ終盤に行われた全員が行う模擬授業では、それまで学んできたことを活かして授業を行いました。それまでチームとして切磋琢磨し合えたことで、良いところも改善できるところも互いにアドバイスし合い、自分だけでは伸ばすことのできなかった部分についても個々のレベルもあげることができたと思っています。この約半年間のとても濃く充実した時間を活かして、春から子どもたちと向き合い頑張っていきます。

教育ボランティア

現場で得られる学び

初等教育学科 3年 ^{あんど う}安藤 ^{みづ ほ}瑞歩

私は、教育インターンシップや教育実習でお世話になっている小学校の4、5年生の宿泊体験学習に引率ボランティアとして参加しました。これまでは学校現場で子どもたちと関わってきましたが、いつもと異なる環境でいつもより長い時間を共に過ごしていく中で学校とは違った子どもたちの生き生きとした姿を見ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。

特別支援級の児童と先生方と一緒に活動させていただいたのですが、はじめは慣れないことばかりでなかなか子どもたちとコミュニケーションがとれず、振り回されてしまうことが多くありました。しかし、先生方の子どもとの関わり方や子どもたちがもっている癖などをよく観察していくことで、少しずつ一人ひとりに応じた関わり方が見えてきました。また、先生方も色々なアプローチを試しながら関わり方を見つけているということを知り、諦めずに粘り強く取り組むことの大切さを学びました。今後もボランティアに積極的に参加して、現場での学びを大切にしていきたいです。

ボランティア活動での学び

子ども支援学科 4年 ^{かたおか}片岡 ^{あゆ か}歩夏

私は大学3年生の3月から特別区の幼稚園へ教育ボランティアに行っています。主に保育の観察、時には保育の補助や支援が必要な子どもへの援助を行っています。

教育ボランティアでは実習とは違い、長期的に子どもの姿や保育を見ることができます。子どもの遊びの様子や変化はもちろん、先生方の援助の工夫を連続的に見て、少しずつ変わる環境構成や先生方の関わりから、そこに込められた教師の願いや指導方法を学ぶことができるというのはとても貴重な経験であり、入職した際の保育の引き出しに繋がると感じています。

先生方のきめ細やかな援助や環境構成を知することは自分の考え方や視野を広げる重要な学びとなっています。特別区の幼稚園での教育ボランティアを通して、私は子どもが自ら「遊びたい」「挑戦してみたい」と思えるような関わり方や環境構成について日々先生方の保育から学んでいます。

今後もこの貴重な経験に感謝し、一回一回のボランティアの機会を大事にしながら、得た経験を自分の保育者としての成長に繋げていきたいです。

未来塾

開講講座は「4講座」、延べ受講者数は「73名」でした

担当・講座名	開講回数・受講者数(令和6年12月末日現在)
大矢隆二先生の 講座1 海洋の知識と実践力を養う自然体験学習 講座2 ペン(硬筆)学習会	2回開講、延べ受講者数 18名 5回開講、延べ受講者数 16名 令和7年1月以降 2回開講予定
小笠原優子先生の 講座 子どもの学びにつながる地域 学習教材調べと教材化	6回開講、延べ受講者数 31名 令和7年1月以降 4回開講予定
廣井雄一先生の 講座 福祉現場を知る(児童養護施設)	1回開講、延べ受講者数 8名